

行為の受け手であることを表す 「～てくる」について —「相手」・「対抗」・「立場」—

山本 裕子

キーワード 「他者による行為の受け手」、「行為の方向性」、「相手」、「対抗」、「立場」

1. はじめに

「～てくる」には多くの意味がある¹が、そのうちの一つに話し手が行為の受け手として関わっていることを表すものがある²。これは先行研究において例えば森山（1988）では「働きかけの方向形態類」、益岡（1997）では「行為の受領」とされているものである。

- (1) 彼は吉報を知らせる電話をカケテキタ。
(2) (娘と交換日記をはじめて、いろいろなことを娘に書いたところ)
「…娘も『おかあさん励ましてくれてありがとう』『将来はマラソン選手になりたい』と思ったことを書いてくる。」(日本経済新聞 2000.7.14)
話し手は(1)では「彼」の電話をかけるという行為の相手に、(2)では「娘」の返事を書くという行為の相手になっている。つまり話し手は「彼」「娘」の行為を直接受ける立場にたっている³。(1)(2)では話し手が、受けている行為に対して、特に否定的に捉えているようには感じられない。しかし同じように話し手が行為の受け手となっている「～てくる」には、次のように事態を否定的に捉えているように感じられるものがある。

- (3) あの男が電車の中で足を踏ンデキタ。

¹ 「～てくる」の多義構造全体について山本（2000）で論じ、「～てくる」の表す多様な意味について述べた。本稿ではそのうち、話し手が他者による行為の受け手となっているものについて考察する。

² 行為の受け手として関わっていないものとしては例えば「雨が降ってくる」のようなものがある。

³ 実際に話し手が行為を受けているわけではなく、行為を受けている人物に視点がある場合も含める。以下、「～の立場」とするときは同様の扱いとする。

(3) では話し手は「男が足を踏む」行為の対象であり、(1)と同様、男の行為を直接受ける立場である。そしてそれに加えて話し手が男の行為を不快に、否定的に捉えていることも感じられる。では次のものはどうだろう。

(4) 仲居頭の経験がある初音が仲居に応募してくる。(中日新聞2000.10.6)

(4) は「初音が仲居に応募する」という行為について述べられている。「初音」の行為は話し手に直接向けられたものではない。(3) では話し手は初音が応募した「仲居」を募集する側にいて、「初音」の行為を迎える立場にたっている。つまり募集する側に話し手の視点があり、その意味では話し手は行為を受けていることになる。

(1)～(4) のような「～てくる」は先行研究では特に区別されず、行為の方向性を表すものとして一括されている。しかし、(1)(2) と (3) そして (4) には上に述べたような相違があるようと思われる。本稿では (1)～(4) はいずれも話し手が行為の受け手であることから、「行為の方向性」とするが、話し手の行為に対する捉え方の相違があることから 3 通りに下位分類し、(1) (2) を「相手」、(3) を「対抗」そして (4) を「立場」とする。次節よりそれぞれの意味、意味派生の仕組み、用いられる動詞句の制約について考察する。また「行為の方向性」と同じように事態の受け手となっていることを表す形式に受身形「られる」(以下「られる」と表記する) があるが、「～てくる」の意味機能をより明確にするために「られる」との対比も行う。

2. 先行研究とその問題点

「～てくる」の意味を記述した研究は豊富にある⁴。このうち多くの先行研究において、「～てくる」の多様な意味の一つとして、「行為の方向性」に相当するものが認められている。しかし意味の認定基準や「くる」に先行する動詞句の性質などについてはさまざまな見解が見られる。本節では先行研究における「行為の方向性」の意味記述、および「行為の方向性」を表すことの可能な「くる」に先行する動詞句に関する記述に注目し、本稿での主張に関わりのある先行研究とその問題点について述べる。

⁴ 本節で挙げた研究以外に吉川(1973)、寺村(1982)、浜田(1989)、森田(1994)、Hasegawa(1996)など多くの先行研究がある。

2-1 森山（1988）

森山（1988）は移動が具体的であるかどうかに着目し、移動が具体的なもの（例：「送ってくる」⁵）を「動詞連合後項ヘッド類⁶」、移動が抽象的なもの（例：「聞いてくる」）を「働きかけの方向形態類」としている。両者を区別する根拠として、後項の「くる」が場所名詞以外を補語に取れるかどうかが、移動の具体性によって異なることを挙げている。しかし意味上の相異点は移動の具体性以外には特に記述されておらず、「～てくる」の性質に踏み込み、到着点側からの叙述であることが話し手のどのような意識の反映であるかという点についての考察はない。したがって1節であげた（1）（2）と（3）、（4）は特に区別されず、「働きかけの方向形態類」として一括されている。

また森山（1988）は「働きかけの方向形態類」に用いられる動詞句は「抽象的な移動（まともな受身にしたとき、もとの動作主がカラ格で取り上げられる）を表す、言う、怒る、攻撃する、信頼する、責める、頼む、頼る、伝える、連絡するのような動詞句（p. 193-194）」であると述べている。しかし例にあげられている動詞のうち「信頼する」や「怒る」は「信頼してくる」や「怒ってくる」のように「～てくる」の形式で、それぞれ話し手のことを信頼している、怒っているという意味で用いるのは難しいように思われる。また本稿で「対抗」の例として挙げた（3）の「足を踏む」や、「立場」の例とした（4）の「応募する」は「抽象的な移動」を表すものに含まれるのであろうか。どの動詞が抽象的な移動に含まれるものかが、森山（1988）の記述では明確に判断できない。

2-2 益岡（1997）

益岡（1997）は移動の意味を持つ動詞による「～てくる」は「空間的接近の意味」とし、移動の意味を持たない動詞句による「～てくる」を「行為の受領」としている。そして「行為の受領」は「所与の行為が当事者に向けてなされる」という状況が比喩的に表される（同：186）と述べている。行為の受領の例には次のものが挙げられている。

- (5) 委員会が調査結果を知らせてきた。（益岡1997：186）
- (6) 相手チームはエースを立ててきた。（同）

益岡（1997）は「行為の受領」で「くる」に前接して用いられる動詞句について、主動詞が受領者を表す名詞句を要求するタイプ（「私に知らせる」など）

⁵ 例は森山（1988）による。

⁶ 移動が具体的であるため、到着点となる名詞句が場所名詞性を必要とする。また「送つてくる」では「東京へ荷物を送つてくる」のように「東京へ」は「くる」と結びつくことから意味の中心が後項の「くる」にあるとされている。

とそのような名詞句を要求しないタイプ（「エースを立てる」など）があり、特に後者では当事者に対して行為が重要な結果をもたらす点が際立たされると述べている。後者の「～てくる」の例は、本稿で「対抗」と考えるものに相当するが、これは、これまでの研究では指摘されていないものである。しかし益岡（1997）の記述では用いられる動詞句の制約が結局ないことになってしまい、どのような動詞句によって「行為の受領」が表されるのかは明確ではない。また益岡（1997）は「行為の受領」のうち（6）のようなものは「行為が当事者に対して重大な結果をもたらすという点（p. 186）」で間接受動文と類似していると指摘している。益岡（1997）はそれまでの先行研究と異なり、動詞の持つ移動の性質のみにこだわらず、「～てくる」の本来の意味、およびその意味の拡張として「行為の受領」を捉えている点で評価できる。しかし上述した点以外の間接受動文と「～てくる」の文の類似点、相違点に関しては述べられていない。

2-3 山本（2000）

山本（2000）は「くる」の意味と「～てくる」の意味の繋がりについて論じたものである。そこでは「くる」と「～てくる」にはそれぞれ多くの意味があるが、「くる」の各意味が文法化したものとして「～てくる」の各意味があることを述べている。そして「くる」の「対抗」の意味が拡張したものとして、「～てくる」の対抗の意味を認定した。「くる」の「対抗」の意味とは次のようなものである。

（7）（将棋で） その手でキタか。

話し手が「対抗関係にある」とみなしている他者との関係において、行為をする側を出発点、行為を受ける話し手側を到着点と想定し、話し手への対抗の気持ちが移動することを「くる」を用いて表すものである。そしてこれが文法化したものとして「～てくる」にも「対抗」の意味を認めた。山本（2000）では「くる」の多義構造全体における各意味の位置づけがされている。また「対抗」で話し手と対抗する関係にあると捉えられているのは、「ガ格」の名詞ではなく、「くる」に先行する動詞句で表される「事態」であることを述べた。そして以下の例から話し手が受身的な立場であるだけでなく、話し手は事態を否定的に捉えていることを示した。

（8） a *彼は私を見てくる。（山本2000：18）

b 彼は私をじろじろ見てくるのでいやだ。

（9） a |讃め言葉・いやみ| を言った。（同）

b |讃め言葉・いやみ| を言われた。

c *誉め言葉を言ってきた。

d いやみを言ってきた。

(8) (9) より「～てくる」を用いた文ではいずれも事態に対し、話し手は快く思っていないことが表されていることがわかる。(8) a b の適格性の相違によって、話し手が否定的に捉えているのは、「彼」などガ格名詞ではなく、「彼が私を見る」という事態であるといえる。また (9) b のように「られる」は肯定的な内容でも可能であるが、「～てくる」は (9) c d のように否定的な内容に限られることから「～てくる」自体に否定的な意味があると考えた。「～てくる」に否定的な意味があることは次の例からも分かる。

(10) a 彼が足を踏ンデキタ。

b 彼が足を踏ンダ。

(10 b) では彼の行為についてのみ述べられているが、(10 a) ではそれに加えて事態を否定的に捉えていることが表されている。そのため、これを見る限りでは「～てくる」自体で否定的な意味が認められる。一方、先の (8) (9) では「くる」を伴わない表現である「彼が私をじろじろ見た」「いやみを言った」自体が否定的なものである。よって (8) (9) では「～てくる」ではなく、先行する動詞句によって否定的な捉え方が表されていると考えられる。これらの例から否定的な捉え方が感じられる場合、それが「～てくる」自体によるものであるのか、それとも動詞句が否定的な内容であることによるものであるのかを区別すべきであると思われる。

以上のような先行研究の問題点を踏まえ、以下に検討すべき課題を挙げる。

1. 「相手」と「対抗」の関係

「行為の方向性」の中に「対抗」の意味を区別するとすると、「対抗」の認定基準は何か。「～てくる」を用いた文に否定的な意味が感じられる場合、どの部分が否定的な意味を担っているのか。

2. 用いられる動詞句の制約

先行研究では行為の向かう相手として「に格」をとる動詞が「くる」に先行するという見解でほぼ一致している。しかし、「に格」をとる動詞句であっても「～てくる」が不適格なもの（例「会ってくる」）もあり、逆に「に格」をとらなくても「～てくる」が適格なもの（例「家賃を上げてくる」）もある。どのように記述すべきであるか。

3. 受身形「られる」との関係

益岡（1997）は「～てくる」と間接受動文の類似性を指摘しているが、具体的にはどのような類似点、相違点があるのか。また場面によって用いられやすい形式があるのであろうか。例えば「られる」よりも「～てくる」の現われや

すいのはどのような場面であり、逆に「られる」の用いられやすいのはどのような場面であるのか。

3. 「行為の方向性」の「～てくる」の意味

本稿では「～てくる」の意味の一つに「行為の方向性」を認める。これは話し手が事態を「移動」と捉える方法の相違によって「相手」「対抗」「立場」の3類型に下位分類できる。それぞれ以下の意味を表す。

「相手」：他者による意志的な行為が話し手に向けられたものと話し手が捉えていることを表す。

「対抗」：他者による意志的な行為が話し手に向けて直接、対抗的にされるものと話し手が捉えていることを表す。

「立場」：他者による意志的な行為を迎える立場にあると捉えていることを話し手が表す。

本節では「相手」「対抗」「立場」の順に、これらの意味派生の仕組み、意味上の特徴、用いられる動詞の性質について述べる。

3-1 意味派生の仕組み

3-1-1 「相手」

山本（2000）では「くる」は空間移動を基本的な意味とし、事態を比喩的に移動と捉えることによって意味が拡張すること、また「～てくる」も同様の拡張を示すことを述べた。ここでは「～てくる」の意味拡張のうち、本稿での議論に関わりのある部分について概要を述べる。

「～てくる」の基本的な意味として「移動の方向性」がある。出発点と到着点が空間的に想定可能な空間的移動を表すものである。

(11) 石が上から落チテキタ。

(12) 彼が訪ネテキタ。

(11) (12) は出発点と到着点が空間的に想定でき、移動物も具体的なものである。また「くる」に先行する動詞句も空間的な移動の意味を含むものである。これが抽象化したものとして、次のような情報の伝達を表すものがある。

(13) 電話がカカッテキタ。

(14) 連絡が回ッテキタ。

(13) (14) では出発点と到着点は空間的な地点というよりも「誰か」人物と考えたほうが自然である。移動物も具体物ではなく、例えば「明日の待ち合わせ

の時間が変更になったこと」のように示すことが可能だが、「電話（の内容）」や「連絡」という抽象的な内容である。よって（13）（14）は基本的な用法ではなく、基本的な空間移動の意味から拡張して用いられているといえる。

「移動の方向性」が比ゆ的に拡張したものとして「行為の方向性」のうちの「相手」がある。「相手」は話し手ではなく行為をする側を出発点とし、話し手側を到着点と想定するものである。1節であげた例をもう一度みてみよう。

(1) 彼は吉報を知らせる電話をカケテキタ。

(2) (娘と交換日記をはじめて、いろいろなことを娘に書いたところ)

「…娘も『おかあさん励ましてくれてありがとう』『将来はマラソン選手になりたい』と思ったことを書いてくる。」(日本経済新聞 2000.7.14)

(1) (2) ではガ格にたつ名詞、「彼」「娘」ではなく、「彼が吉報を知らせる電話をかけた」や「娘が『将来は…』と思ったことを書く」という行為を移動物と捉えている。そしてそれが出発点をガ格の名詞である「彼」「娘」のところとし、到着点を話し手として移動すると見立てられている。ここで移動の対象となる行為はいずれも行為が向かう相手を必要とするものである。その到着点は常に話し手であり、話し手は行為の受け手となっている。このようなものを「相手」と呼ぶことにする。「相手」では「移動の方向性」よりも移動物、出発点、到着点の全てが抽象化しており、より比ゆ的な意味と考えられる。

3-1-2 「対抗」

「相手」の「～てくる」は相手を必要とする行為について述べるものであり、かつその相手は話し手である。つまり出発点と到着点は動詞の意味に内在するものと考えられる。これに対し、「対抗」では動詞自体は特に相手を必要とするものではなく、話し手の事態に対する捉え方から出発点と到着点を想定するものである。相手の行為を話し手に対して「対抗的である」と捉え、行為をする側を出発点、行為を受ける側を到着点とする。「対抗的」な関係とは話し手とは利害関係が一致しないなどの理由から、話し手が対抗的だとみなしているものであり、その「対抗的な行為」が行為をする側から話し手のところへ移動すると捉えている。よって「相手」よりも比ゆ的な捉え方がされているものといえる。具体例で確認していこう。

(3) あの男が足を踏ンデキタ。

(15) 大家が家賃を上ゲテキタ。

(3) では「あの男が足を踏む」という行為が話し手には意図的で話し手への対抗的なものと捉えられている。また(15)では「大家が家賃を上げた」という行為も単に契約更改に伴う家賃の値上げのような場合ではなく、話し手に対

する嫌がらせなど何か不当な行為であるように捉えられているように受け取れる。このように上の二つの例では、話し手が行為を否定的に捉えているように思われる。益岡（1997）があげている例も同様に説明できる。

(16) 相手チームはエースを立ててきた。(益岡1997:186)

(16)においては、「エースを立てる」という動詞句自体に行為の相手が要求されているのではなく、相手チームの行為が話し手（側）に対抗するものとして捉えられており、話し手へ向かう移動を想定し「～てくる」を用いている。

(16) でも相手チームの行為に対して話し手は「対抗的」であり、否定的に感じていると解釈できる。(3)(15)(16)の「～てくる」に見られる否定的な感じ方は「くる」を伴わない表現と比較することによって確認できる。

(3') あの男が足を踏ンダ。

(15') 大家が家賃を上ゲタ。

(16') 相手チームはエースを立テタ。

「くる」を伴わない形式では単に他者による行為が述べられている。(3')は話し手の足が行為の対象として、事態に関わっている。しかし話し手がそれについてどのように感じているかということは不明である。さらに(15')(16')では話し手が事態に関わっていることも含まれず、話し手の事態の捉え方も全くわからない。しかし「くる」を伴う文では意志的に話し手に向けられた行為で、それに対し、話し手がマイナスに捉えているということが感じられる。よって(3)(15)(16)では「くる」によって話し手が事態に対してマイナスに捉えていることを表しているといえる。

3-1-3 「立場」

「立場」は「相手」のように動詞の意味に出発点と到着点が内在するものでも、「対抗」のように対抗的な関係から出発点と到着点を想定するものでもない。話し手が他者の行為を迎えるという立場にあることを「くる」を用いて表すものである。1で挙げた例で確認してみよう。

(3) 仲居頭の経験がある初音が仲居に応募してくる。(中日新聞 2000.10.6)

(3) では「初音」の行為は直接的には「仲居」のポストに働きかけをしているのであり、話し手に直接向けられたものではない。話し手は仲居を募集する側でなどの立場で初音の行為に関わっていると考えられる。話し手は応募者を迎える立場にあり、そのために「～てくる」が用いられている。つまり「立場」では出発点、到着点ともに具体的に空間的に設定されているわけではなく、「くる」を用いることによって話し手の立場が表されている。次の例でも話し手の立場は同様である。

(17) 多くの人が奨学金を申請シテキタ。

(18) 私が受付にいる時、彼女が試験に申し込ンデキタ。

ここでは話し手は奨学金や試験に関わる事務職として、行為を迎える立場にあるような場合が考えられる。

また「くる」に先行する動詞句が同じものであっても、話し手の立場や捉え方が異なるれば、「立場」ではなく、「対抗」を表す。

(19) 私が応募すると知つて、彼も応募シテキタ。

(19) では（3）と同じく「応募する」が用いられているが、話し手は彼の応募を迎える立場にいるわけではなく、彼が応募するという行為を話し手（の行為）に対して対抗するものであると捉えている。このことからも「立場」や「対抗」が動詞の意味に内在する移動の性質を「～てくる」で表したものではなく、話し手の捉え方の比喩的な拡張によるものであることが分かる。

3-2 意味上の特徴

3-2-1 マイナスの影響性と一方指向性

「相手」、「対抗」はともに行為を移動物と捉えているが、その行為を肯定的、否定的のどちらに捉えるかという点で違いがある。「相手」は肯定的、否定的のどちらの場合にも用いられるが、「対抗」ではマイナスに感じていることを表す。本稿では、「対抗」では「～てくる」自体がマイナスの意味を持つのに対し、「相手」では「～てくる」自体は肯定的、否定的のどちらでもないと考える。「相手」では事態が他者によって一方的に行われる行為であり、話し手はその行為の実現に関与しておらず、影響はマイナスのものの方が大きく感じられるため、そのように解釈されることが多いと考える⁷。次の例で確認してみよう。

(20) (姑は) 野菜の切り方ひとつであれこれ口を出してくる。ひとりで作るからといってふたりでやりたがる。(名古屋リビング 2000. 6. 24)

(21) (自宅が浸水して大変なのに) 会社は『忙しいから出社しろ』と言つてくるし…。(中日新聞 2000. 9. 13)

(20) (21) では「(姑が) あれこれ口を出す」「会社が『忙しいから出社しろ』という」という事態が話し手にとって不快なものであり、マイナスに捉えられるものである。しかしこれらの例では「くる」を伴わない表現でも、事態はやはりマイナスに捉えられている。

⁷ なお「立場」も事態に対してプラスあるいはマイナスに捉える、といった事態に対する話し手の評価は含まないと考える。

(20') (姑は) 野菜の切り方ひとつであれこれ口を出す。

(21') 会社は「忙しいから出社しろ」と言うし…。

(20) (21) と (20') (21') の比較によって、「～てくる」では話し手が直接行為を受けていることが明示されるが、事態に対してはどちらも否定的に捉えていることが分かる。次の例では「くる」を伴っているが、話し手は事態を肯定的に受け止めている。

(22) 孫を連れていたら、そこにいた女の人が話シカケテキテクレマシタ。

(22) は「～てくれる」と共起できることからも、「～てくる」自体にマイナスの意味があるわけではないといえる。このような場合も含めて、(20) ~ (22) に共通して見られる性質は「事態が一方向的なものである」ことである。「～てくる」は事態を移動に見立てるものである。つまり出発点と到着点を想定し、出発点から到着点に向かうものと捉えられている。ここで話し手の視点は到着点にあり、事態の実現には関与していない。つまり話し手は全くの受身的な立場である。(20) (21) のように「くる」を伴う表現の方が、話し手の受けている否定的な印象がより大きくなるように感じられるが、それはこの一方向性の性質によるものと考えられる。そのため、マイナスに受け取れる事態の叙述に「～てくる」を用いることが多いのであろう。

これに対し、「対抗」の「～てくる」では「～てくる」自体にマイナスの意味があると考えられる。「対抗」では、事態の生起が唐突であるように思われたり、一方的であるように思われたり、また話し手の意志に反して進められたりする場合に、それを他者のところを出発点として話し手に向かう移動に見立てている。以上述べたように「相手」と「対抗」で表現上の効果は似たようなものになっている場合であっても、マイナスの意味を担う部分は異なると考えられる。

3-2-2 意図性

「行為の方向性」では意志的な行為を表す動詞句が用いられるが、特にその中でも「対抗」では相手の意志が、意図的に話し手に向けられたものであるということが表されている。それは意図性を表す副詞との共起に反映している。

(23) a 彼がわざと足を踏ンデキタ。

b *彼がうっかり足を踏ンデキタ。

(23 a) のように「わざと」では行為を話し手に対抗的にしているという意図が明確になり適格であるが、(23 b) の「うっかり」ではそのような意図が表れず不適格である。同様に「気が付かずに」のような行為の偶然性を表す副詞も共起することはできない。このように「わざと」のような行為の意図性を表す

副詞とは共起するが、「うっかり」のような意図性のない副詞とは共起しないことから「対抗」では他者が意図的に話し手に向けて行為をすることを表していることが確認できる。なお「立場」は話し手が行為を迎える立場にあることを表すが、行為に対する評価を含むわけではなく中立的なものである。

(24)*彼女がわざとその仕事に応募シテキタ。

その証拠に(24)のように「わざと」と共起すると「対抗」の意味に解釈されてしまい、「立場」には解釈できない。

3-3 用いられる動詞

本節では「～てくる」の形式で用いられたとき、「相手」「対抗」「立場」の読みとなる動詞について、その特徴を順に考察する。

3-3-1 「相手」の読みを生じる動詞

「～てくる」となったときに、「相手」の意味を表すことが可能な動詞の意味特徴として、行為の向かう相手をとる動詞であること、一方向性⁸があること、意志的動作であることが挙げられる。以下順にみていく。

3-3-1-1 行為の向かう相手をとる動詞（句）

行為の向かう相手をとる動詞（句）とは、行為者とその行為を受ける相手が存在するもので、「訴える、話しかける、さわる、だきつく」などのように補語に「～に格」あるいは「～を格」をとり、行為の向かう相手を必要とする動詞（句）のことである。ただし行為の向かう相手をとる動詞であっても、二者が対等な関係、つまり双方向的な場合には「～てくる」で「相手」の意味を表すことができない。

(25)*私たちは結婚シテキマス。

(26)*（彼は）私に会ッテキタ⁹。

これらはいずれも話し手が行為の相手であるという意味には解釈できない。

⁸ 浜田（1989）は「行為の方向性」に相当する意味として「出来事が話者にまで及ぶことを意味する『～てくる』」とし、「『て』の前の動詞が一方向への動作を表し、しかもその動作が話者にまで及ぶことを明示する場合、『～てくる』が使われる（p. 53）」と述べている。

⁹ 「彼に会ってきた」の場合も「彼に会って、そして来た」のように継起的な解釈は可能だが、「相手」の解釈は不可能である。

3-3-1-2 一方向性を表す動詞

3-1で述べたように、「～てくる」の意味拡張は事態を移動に見立てることから生じている。事態に出発点と到着点が想定され、出発点から到着点へ向かうものと捉えられている。このような一方向性から、「～つく」「～つける」「～かける」「～かかる」などを伴う複合動詞が用いられたり、一定の方向に状態変化が進行することを表す「どんどん」「つぎつぎ」のような意味の副詞を伴うことが多く見られる¹⁰。

(27) a 彼が急に私に抱キツイテキタ。

b ??彼が急に私を抱イテキタ。

(28) あの人はどんどん文句を言ッテクル。

(27) に示したように「抱く」よりも「抱きつく」のように対象へ向かうことが明確な動詞のほうが「相手」を表すには適切性が高い¹¹。

また、授受益の絡む行為を表す動詞では「～もらう」「～てくれる」を用いる必要があり、「～てくる」では不適格となる。例えば「教える、貸す、誉める」など授受益を含む意味のものがそうである。

(29) a *彼が加藤さんの住所を教エテキタ。

b 彼が加藤さんの住所を教エテクレタ。

「教える」は二者間の行為であり、また「彼」と話し手の間の役割も明確な一方向的なものである。しかし「～てくる」を用いて、話し手が行為の受け手であることを表すことはできない。「教える」には「習う」側が必要であるが、「習う」側は行為の受け手であると同時に受益者でもある。「～てくる」では話し手は話し手の意志に関わりなく行われる行為の一方的な受け手であることが表されるので、このような行為の受け手側として習う側を想定するならば、次のように受益者ではない「習う」側を想定しなければならないだろう。

(29) c 彼が加藤さんの住所を無理やり教えてきた。

(29) c では私は「習う」側であるが、彼の行為の恩恵を受けているとは言えず、彼の行為を一方的な不快なものと思っていることが表される。(29) に示したように「教える」は「無理やり」を伴わなければ「～てくる」が不適格であることから、「～てくる」は受益者の立場とは相容れにくいことが分かる。実際に「彼が加藤さんの住所を教えた」ことが話し手にとって迷惑なことであった

¹⁰ 吉川（1973）も方向動詞の形態論的特徴として、「～かける」「～かかる」という複合動詞が多いことを指摘している。

¹¹ 「抱く」と「抱きつく」のように意味的にも形態的にも類似の語彙がある場合、二者間の行為であっても、行為が方向性を持って表されることを明示した語の方が適切性が高いようである。

としても、「無理やり」を伴わない(29a)は不適格である。(29a)が不適格であることにより、授受益を含む語彙を用いる場合は、受益者の立場にたつものは受益者であることを明示することが必要であり、語彙により「～てくる」を用いるには制約があることが分かる。2節で山本(2000)では「誉めてきた」の不適格性を「～てくる」自体にあるマイナスの性質によるものと考えたことを述べた。しかし、3-2-1で述べたように「相手」では「～てくる」自体にマイナスの性質はない。よって「誉めてきた」の不適格性は「～てくる」のマイナスの性質と「誉める」のプラスの性質が相容れないからではなく、「誉める」に授受益が伴うことによるものと考えた方が妥当であろう。

3-3-1-3 意図性を表す動詞

「～てくる」が「相手」の意味を表す時、意志的な動詞が用いられる。よって、自発的意味の動詞は、それが行為の向かう相手をとる動詞であっても、「～てくる」の形式で「相手」を表すことはできない。

(30) 彼は私に飽キテキタ。

「飽きる」は主体の意志の有無に関係なく生じる知覚を表すものである。このような自発的意味の動詞では、「飽きる」対象が話し手であっても、「認知領域への移動」の意味になる¹²。

3-3-2 「対抗」の意味を生じる動詞

「対抗」は「相手」の延長上にあると考えられるので、基本的には「相手」の読みを生じる動詞の特徴と重なる。しかしその相違点がある。

1 行為の向かう相手を「に格」などで取る必要はない

2 相手と対抗的な関係にある

「対抗」に用いられる動詞句は行為の向かう相手を補語には取らないが、意味的に含む。例えば「家賃を上げてきた」における「(家賃を)あげる」では家賃を払う店子がいるのが普通である。また「候補にA氏を立ててきた」では対立候補を擁する団体がいるのが普通である。これらの動詞句では「～てくる」を用いると、「対抗」の意味になる。行為の向かう相手を補語にとらず、意味的にも二者間の行為を表さない動詞句は「～てくる」の形式で「対抗」の意味は表さない。例えば「食べる」「買う」がそのような例としてあげられる。

¹² 山本(2000)では「～てくる」の意味の一つに「認知領域への移動」として話し手が感情、感覚などを知覚していることを表すものを認めた。「電車のライトが見えてきた」などが「認知領域への移動」の例として挙げられる。またこの意味に相当するものは多くの先行研究でも指摘されている。

(31)*大事にとっておいたケーキを弟が食べテキタ。

(32)*あれは私が買おうと思っていたのに、彼が先に買ッテキタ。

(31) (32) の「弟がケーキを食べる」「彼が先に買う」という事態は「大事に取っておいた」や「買おうと思っていたのに」によって話し手の気持ちに反するもので、話し手にとって快いものではないことと捉えられていることがわかる。このように話し手は他者的一方的な行為の影響を受けているが、そのことを「～てくる」を用いて表すことはできない。このような動詞では、話し手が行為の受け手であることを表すものとして「～てくる」ではなく「られる」が用いられる。

(31') 大事にとっておいたケーキを弟にタベラレタ。

(32') あれは私が買おうと思っていたのに、彼に先に買ワレタ。

(31') (32') では話し手が他者的一方的な行為の受け手であることが表されている。このように、二者間の行為を表さない動詞では、直接話し手が影響を受けていることが表されないため、話し手が事態を否定的に見ているという文脈があっても、「対抗」の意味を表しにくい¹³。

3-3-3 「立場」の意味を生じる動詞

「立場」も「相手」の延長上にあると考えられ、「相手」の読みを生じる動詞の特徴と重なる。相異点として以下の点が挙げられる。

1. 立場、役割などを補語にとる動詞

2. 話し手はその行為を迎える側として、行為に関わっている。

「立場」では他者の行為は話し手へ直接向かうものではない。他者の意志は直接的には何らかの役割・立場に向かっていて、話し手はそれを迎える立場としていわば間接的に関わっている。このような関係を表す動詞句「応募する、立候補する、登録する、申請する」などが「立場」の意味を表す。

4. 「られる」との対比

本節では「行為の方向性」の「～てくる」と同様に、行為を受ける側から述べる「られる」を取り上げ、意味および用いられる動詞について考察する。受動態に関する先行研究は非常に多いが、本稿では益岡(1991)の類型化に従う¹⁴。

¹³ 「対抗」だけでなく、「相手」「立場」も表さない。

¹⁴ 益岡は受動態を話し手の事態との関わり方という主観性の観点から類型化しているため、本稿の見方と一致すると思われる。

益岡（1991）は受動表現を次のように類型化している。

益岡（1991）の受動表現の類型

属性叙述受動文¹⁵

降格受動文¹⁶

受影受動文（直接受身・間接受身）

このうち受影受動文が「ある出来事から主体が何らかの影響を受けるという事態を表す」ものであり、「行為の方向性」の「～てくる」と通じるものである。受影受動文には、いわゆる直接受身と間接受身がある¹⁷。以下、順に意味の相違、用いられる動詞を見ていこう。

間接受身は「被害の受身」「迷惑の受身」ともいわれるよう話しが間接的に受けるマイナスの影響について述べるものである。「相手」「対抗」では話しが手は到着点として、相手の行為を直接受けているため、間接的な影響は「～てくる」では表せない。つまり他者の行為が結果として話しが手に影響するのではない。これは「られる」との比較によって明らかである。

- (33) a 赤ん坊に泣カレタ。
b *赤ん坊が泣イテキタ。
- (34) a 父親に死ナレタ。
b *父親が死ンデキタ。
- (35) a 知らない人に話シカケラレタ。
b 知らない人が話シカケテキタ。

(33)～(35)においてaは「られる」、bは「～てくる」の文である。(33a) (34a)はいわゆる間接受身の文である。話しが手は「赤ん坊が泣いた」「父親が死んだ」という事態において、困っていたり、悲しんでいたりという影響を受けている。しかしいずれも「赤ん坊」や「父」が話しが手に向けて意図的にした行為ではない。よってこのようなケースでは「～てくる」は不適格となる。一方(35a)は直接受身の文である。話しが手は「知らない人が話しかける」という行為の受け手として事態に直接関わっている。そして(35b)においても話しが手の立場は同様である。これにより「られる」では直接的、間接的であるかを問わず、話しが手が受け手となっている場合に用いることができるが、「～てくる」では常に行為が直接話しが手へ向けられているように話しが手が捉えている場

¹⁵ 益岡（1991）は属性叙述受動文について「ある対象の性質や特徴を表現する属性叙述の文（p. 192）」とし、「花子の家の高層ビルに囲まれている。」を例としてあげている。

¹⁶ 益岡（1991）によると降格受動文とは「動作主を主体の位置から降ろし、変わりに動作の対象を主体として表現するもの」とし、「答案用紙が回収された」を例にあげている。

¹⁷ 直接受身・間接受身の区別について本稿では寺村（1982：215）の記述に従う。

合に用いることが可能であるといえる。

既に述べたように直接受身はプラスの内容についても使え、事態を否定的に捉えているとは限らない。直接受身になる動詞のうち、「食べる」などのように、二者間の行為を表さない、行為の向かう相手をとる動詞でないものは「られる」になりやすく、「～てくる」にはなりにくい。しかし「訴える」や「言う」など二者が関わり、行為の向かう相手を補語にとる動詞は「～てくる」も「られる」もどちらも可能である。

- (36) a とっておいたおやつが弟に食べラレタ。
b *弟がとっておいたおやつを食べテキタ。
- (37) a 家の前に車を止めないでくれと言ワレタ。
b 家の前に車を止めないでくれと言ッテキタ。

また行為の向かう相手をとり、二者が関わる行為であっても、「～てくる」と「られる」が同じように用いられるわけではない。「～てくる」は直接「意図的に」話し手に向けられた行為であることを明示するものであるが、「られる」は意図的であるかどうかは問わない。

- (37) a 彼に（わざと、うっかり）足を踏マレタ。
b 彼が（わざと*うっかり）足を踏ンデキタ。

このように「られる」では話し手は行為の影響を受ける側であるが、プラス、マイナスどちらの事態に対しても用いることができる。これに対して「～てくる」では、他者から一方的に向けられた行為であるととらえており、話し手はマイナスに受け取っている事態の叙述に用いられることが多い。このことは話し手と行為をする側と対立性が鮮明な状況、たとえば訪問販売や勧誘の被害について述べる場面¹⁸では「～てくる」が用いられることが多いことからも確認できる。

- (38) 孫のお祝い事や行事には一切お金を出してくれない姑。そのくせ自分の遠い親戚の冠婚葬祭には、当然といった顔で、私たちに多額のお金を請求してくれる。(名古屋リビング 2000. 6. 24)
 - (39) 「限定一戸の格安物件を分譲」都内在住のAさんはこんな見出しが躍る住宅広告に目を奪われ、仲介業者を訪ねた。しかし担当者は「あの物件は格安だけあってもう売れてしましました」と言って、すぐに他の物件をしつこく勧めてきたという。(日本経済新聞 2000. 8. 20)
- 以上のように、本節では「～てくる」と「られる」を対比し、形式の選択に

¹⁸ 新聞などの投書欄のうち消費者相談のコーナーなど苦情を訴える場面では「～てくる」の現われる頻度が非常に高かった。

語彙と場面の関わりを考察した。表1にまとめて示す。

表1

動詞	「～てくる」	間接受身	直接受身
自動詞(非意志動詞)	×	○マイナスの影響	
他動詞(意志動詞) 二者間の行為	○「行為の方向」 ○「対抗」 ○「立場」		○事態に対してプラス・マイナス両方可
非二者間の行為	×		○

5. おわりに

本稿では、「～てくる」の意味の一つに行き先の受け手であることを表すものを「行為の方向性」として認め、そこでの「移動」の捉え方によって「相手」「対抗」「立場」の3つの類があることを述べた。それぞれ出発点、到着点および移動物が抽象化し、「移動」を比喩的に捉えていることがわかった。また、それぞれの意味機能について考察し、「～てくる」が話し手のどのような意識の現われであるかについて述べた。

3-3-1-2では、授受益を含む語彙では「～てくる」の使用に制約があり、「～てくる」ではなく「～てくれる」など授受益を明示する表現が選択されることを指摘した。このような語の意味と表現の選択に見られる制約は他の表現にも見られるものであろうか。特に「～てくる」と同様に影響を受ける側の表現について、今後詳しく考察したい。

引用文献

- 寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
 浜田真理子 1989「『行く／来る』と『～ていく』・『～てくる』の意味の繋がり」『Sophia Linguistica』27 p.p. 45-56
 益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版
 1997『複文』くろしお出版
 森田良行 1994『動詞の意味論的文法研究』明治書院
 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院

- 山本裕子 2000 「『くる』の多義構造－『くる』と『～てくる』の意味の繋がり－」 『日本語教育』105号 日本語教育学会
- 吉川武時 1973 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』(1975) (金田一春彦編) むぎ書房 所収
- Hasegawa, Yoko 1996 *A Study of Japanese Clause Linkage*. CSLI Publications.

例文出典

新名古屋リビング新聞／中日新聞／日本経済新聞